

東日本大震災を描いたマンガ

2011年度は研究休暇を利用して、研究対象である宮沢賢治の故郷である岩手県で生活し、彼が登った山、歩いた道をたどってみようと考えていた。そろそろアパートでも探そうかと思っていた矢先に東日本大震災が起こった。被害状況がだんだんと明らかになっていくのを見ているうちに、どうしても今、文学研究のために長期滞在する必要はないだろうと思うようになり、何度か資料収集のために岩手に行っただけで研究休暇は終わってしまった。

それでも地震や津波、原発について考えなかった日はない。批評家の東浩紀は、震災を機に新しい人間になってしまったようだと述べていたが、私も同じ気持ちだ。生活面でのダメージは阪神淡路大震災に比べれば小さかったが、文化面での衝撃は比較にならないほど大きかった。震災による文化面への影響は、これからだんだん表面化してくるように思うが、マンガには早くも震災を描いた作品が登場している。

震災以降の日本をうまく描いていると思える作品に、しりあがり寿の『あの日からのマンガ』がある。作者は、自分が受けたショックの100分の1も描けていないと語っているが、現在進行形で見たこと、感じたこと、行動したことを、これだけきちんとマンガにしている人はいないと思う。ことに300万人（夕刊）の読者を抱える朝日新聞にこうしたマンガを描いた英断は評価すべきだろう。

この他、仙台で被災した主婦・槻月沙江の『震災7日間』は、地震直後の被災者たちの行動や心情を報告しているし、岩手県の地方紙を舞台にした飛鳥あるとの『ゴーガイ！ 岩手チャグチャグ新聞社』も、連載中におこった震災を作品に取り入れている。鈴木みそは『僕と日本が震えた日』をネットで無料公開している。また、震災の数年前に描かれたものだが、原発で働く人たちを描いた勝又進の『深海魚』も忘れることはできない。

震災後に私たちが進むべき道は、多くの表現者の発する声に耳を傾けることによって見えてくるかもしれない。